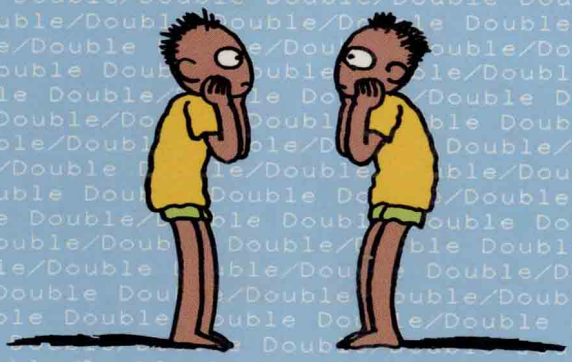
ダブル／ダブル

マイケル・リチャードソン［編］

柴田元幸／菅原克也［共訳］



白水社

ダブル/ダブル

マイケル・リチャードソン[編]

柴田元幸／菅原克也[共訳]

白水社

訳者略歴
柴田元幸
一九五四年生
東京大学文学部卒
アメリカ文学専攻
東京大学教養学部助教授
主要訳書
E・ケイニン「エンペラー・オブ・ジ・エア」（文藝春秋）
P・オースター「幽霊たち」（新潮社）「鍵のかかった部屋」（白水社）

菅原克也
一九五四年生
東京大学文学部卒
比較文学専攻
東京工業大学助教授
主要訳書
P・レヴィーン「野球をビジネスにした男」（平凡社）
J・マカルーン「オリンピックと近代」（共訳）（平凡社）

ダブル／ダブル

一九九〇年二月一五日 印刷
一九九〇年二月二五日 発行

訳者 © 柴田元幸 菅原克也
発行者 高橋孝
印刷者 山田隆
発行所 株式会社 白水社
東京都千代田区神田小川町三の二四
営業部〇三（五二）七八一一
編集部〇三（三九）七八二一
振替 東京 九一三三二八
郵便番号一〇一

精興社印刷・黒岩製本

ISBN 4-560-04264-0

Printed in Japan

ダブル／ダブル

DOUBLE/DOUBLE
First published by Penguin Canada
Copyright © Selection, Introduction and Biographical Notes, Michael Richardson, 1987
Japanese translation rights arranged with Penguin Books Ltd., London through Tuttle-Mori Agency Inc., Tokyo

"The Expensive Delicate Ship" by Brian W. Aldiss
Copyright © 1977 by Brian W. Aldiss
Japanese language anthology rights arranged with A. P. Watt Ltd., London through Tuttle-Mori Agency Inc., Tokyo

"The Case for the Defence" by Graham Greene
Copyright © Graham Greene
Japanese language anthology rights arranged with Laurence Pollinger Ltd., London through Tuttle-Mori Agency Inc., Tokyo

"The Double" by Ruth Rendell
Copyright © Ruth Rendell
Japanese language anthology rights arranged with Intercontinental Literary Agency, London through Tuttle-Mori Agency Inc., Tokyo

"Petition" by John Barth
Copyright © 1966 by John Barth
Japanese language anthology rights arranged with Rogers, Coleridge & White Ltd., London through Tuttle-Mori Agency Inc., Tokyo

"The Dummy" from I, ETCETRA by Susan Sontag
Copyright © 1978 by Susan Sontag
Japanese language anthology rights arranged with Farrar, Straus & Giroux, Inc., New York through Tuttle-Mori Agency Inc., Tokyo

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

当然ながら
ジニーとハンナに

世界を二重に私の目は見る
二重の世界はつねに私とともにある。
ウィリアム・ブレイク

訳者まえがき

この本は、マイケル・リチャードソンというカナダ人が編んだ英文のアンソロジー *Double/Double* の翻訳です。

このアンソロジーはとても明快な方針のもとに作られています。すなわち――原則として二十世紀に書かれた西洋の小説の中から、〈双子〉〈分身〉〈鏡〉〈影〉〈人造人間〉といった、いわば「一人が二人で二人が一人」の物語を集めて面白い本を作る。これがリチャードソン氏の狙いでした。

そしてその狙いは、われわれ訳者が見るかぎり、上々の成功を収めたと言っていいと思います。だからもしあなたがケストナーの『ふたりのロッテ』の愛読者だったり、マルクス三兄弟やチャップリンがくり広げる鏡のギャグが大好きだったり、あるいは、この本のために素敵な装幀を作ってくださった玖保キリコさんの描く一郎君とみちこさんのファンだったりしたら、あなたがこの本を気に入ってくださる確率はかなり高いのではないか、とわれわれは期待しています。

ピーター・コーツという学者は、双子のテーマは喜劇に頻出し、分身のテーマはシリアスな物語に頻出すると指摘しています。言いかえれば、「自分は自分、他人は他人」という命題が、双子においては愉快な崩れ方を、分身においては恐ろしい崩れ方をするということでしょう。いずれにしろ、こうした物語に共通する面白さのひとつは、いままで自明だと思っていた自分と他人の境界が、突然あいまいになってしまうというあたりにありそうです。

けれど、シカツメらしい議論はこのくらいにしておきましょう。われわれとしては、多くの方がこの本を楽しんでくださることを願うばかりです。それでは――

目

次

訳者まえがき　4
ジョージ・D・ペインター――かれとかれ　8
ハンス・クリスチャン・アンデルセン――影　11
ルース・レンデル――分身　33
トンマーゾ・ランドルフィ――ゴーゴリの妻　57
ジョン・バース――陳情書　79
ポール・ボウルズ――あんたはあたしじゃない　107
グレアム・グリーン――被告側の言い分　125

スーザン・ソンタグ――ダミー　133
ブライアン・W・オールディス――華麗優美な船　149
アルベルト・モラヴィア――二重生活　161
エリック・マコーマック――双子　171
フリオ・コルタサル――あっちの方では――アリーナ・レイエスの日記　183
アルジャーノン・ブラックウッド――二人で一人　201
アドルフォ・ビオイ=カサーレス――パウリーナの思い出に　215
分身の世界――編者あとがき　240

装幀　玖保キリコ

かれとかれ

ジョージ・D・ペインター

ジョージがかいだんのぼったら
そこにでてきた　こわいかお

ねずみがどさりところげおち
あいさつなしに　にげてった

ねずみはやせてて　かいだんたかい
けれどこわいは　そのおかお

ちちのぼうれい？　いやちがう
ははのぼうれい？　いやいやちがう

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

とものぼうれい？　やっぱりちがう
もっとそれより　おそろしい

なにをかくそう　かれじしん
かおをみあわす　かれとかれ

はじめはどちらも　そしらぬそぶり
やがてとまって　みつめあう

ひとりはにっこり　ひとりはむっつり
ひとりはのぼって　ひとりはおりた

どっちがのこって　どっちがでたか
そいつはしぬまで　わからぬなぞさ。

影

ハンス・クリスチャン・アンデルセン

ハンス・クリスチャン・アンデルセン（デンマーク、一八〇五―一八七五）

私がはじめてアンデルセンに出会ったのは、子供向けのミュージカル映画『ハンス・クリスチャン・アンデルセン』を観たときのことです。「醜いアヒルの子」や「親指姫」を歌うダニー・ケイの姿――それが私にとってアンデルセンをめぐる最初のイメージでした。フランク・レッサーのペンになるその甘ったるいメロディーからは、アンデルセンの持つ暗い側面などはとうてい感じとれませんでした。しかしそれを言えば、ヴィクトリア朝時代に出版された彼の作品の英訳だって同じことです。後世の翻訳者エリック・クリスチャン・ハウガードは、ヴィクトリア期の翻訳をふり返って、「唇にされたはずのキスが、翻訳では頬っぺたになっている」と批判しています。ヴィクトリア朝の人々は、アンデルセンの作品を子供部屋のレベルに限定してしまい、そのエロティシズムのみならず、文学性高い文章のリズムをも奪ってしまったようです。

アンデルセンが書いたのは「おとぎ話」ではありません。あるいはまた、グリム兄弟のように、民話を収集したわけでもありません。彼の物語は、彼個人の苦悩から生まれてきたものです。貧民街に生まれたアンデルセンは、売春宿を経営していた叔母と、精神病院の庭の管理人だった祖母とに育てられました。綴りも満足でなかったにもかかわらず、彼はやがて作家として成功を収め、一八三五年、子供向けの空想的な物語を集めた『子供のためのお話』で名声を得ました。これらの物語にあって、悪者は人食い鬼や魔女ではありません。人間の醜さ、とりわけ虚栄心と冷淡さこそが悪者なのです。

何度か恋に落ちはしたものの（特に歌手のジェニー・リンドとの恋愛はよく知られています）、アンデルセンは生涯独身を通し、マスターベーションの「罪」について激しい自責の念に苦しみつづけました。このような暗い心性が、「鉛の兵隊」「モミの木」「影」といったほろ苦い物語の奥にひそんでいるのでしょう。「影」はもっぱら現代文学に材を求めた本アンソロジーのなかで、唯一十九世紀に書かれた作品です。古典的なドッペルゲンガー・ストーリーであるとともに、妙に現代的なところもある物語で、カフカの暗いヴィジョンの先駆と言ってもよいのではないでしょうか。

地中海の岸辺では、太陽の光は灼けるように熱い。あまりの暑さに、人々はマホガニー色に日焼けしてしまうほどだ。誰もがパン屋の小僧みたいに色白だった北の国から来た若い学者は、やがて自分の旧友である影を疑いの目で見るようになった。南国では、昼のあいだはドアも鎧戸も閉め切って家の中にいることが多い。家々は、あたかもみな寝しずまっているような、あるいは誰も中にいないような様相を呈する。若い北国の学者は、牢獄に閉じこめられているように感じた。それに影のほうもそれまでになく小さく縮こまってしまっていた。だが太陽が沈み、ロウソクの火が部屋を照らすようになると、影もまた長く伸びてくる。次第に大きくなってゆく影を見るのは本当に愉しいことだった。影は壁の上に身を伸ばしてゆき、ほとんど頭が天井に届きそうになった。

「ここでは星もずいぶん輝きを増すようだ」と若い学者は思った。彼はバルコニーに出て、影と同じように、伸びをした。今や町中のバルコニーに人が出て、涼しい夕方のひとときを楽しんでいた。昼間は死んだように人気のなかった街が、実に生き生きとしていた。通りには人が溢れていた。

仕立屋や靴屋は作業台を表に持ち出して仕事に精を出していた。女たちは背もたれの真っ直ぐな椅子に坐って、噂話に花を咲かせていた。背中に重い荷を背負ったロバが、年端の行かない女中みたいに、あちこち躓きながら歩いていった。子供たちもいたるところに姿を現わしていた。笑っている子供。遊んでいる子供。時にはいかにも子供っぽく泣き叫んでいる子供。子供たちはいくらでも速く駆けることができるので、一体今自分が悲劇を演じているのか喜劇を演じているのかもわからずにいる。それからまた光の渦！　何千という明りが流星のように瞬いていた。葬式の行列も通った。先頭には黒と白の服を着た聖歌隊の少年たちが立ち、死者を悼む、だが表情はさほど悲しげでもない人々が、黒い布で覆われた馬車のあとにつき従っていた。教会の鐘が鳴っていた。「これが人間の生活というものだ」と若い学者は思った。そしてすべてを思う存分味わおうとした。

しかし、彼の部屋の真向いにある家だけは、今も昼の間のように静まりかえっていた。通りはとても狭いので、向かい側の家のバルコニーまではほんの数メートルの距離だ。彼は何度もバルコニーに立って、じっと様子をうかがってみたが、誰一人現われる気配はなかった。それでもそこには花が飾られていたし、花の勢いもいいようだった。ということは花の手入れをする人が誰かいるということだろう。さもなければ花はとうに暑さにやられて萎れているはずだ。「そうだ。誰か水をやる人がいるに違いない」と彼は考えた。しかも鎧戸は開けてあるし、あかりこそ見えないものの、時々音楽が聞こえてくる。若い学者はその音楽を「このうえもなく美しい」と思ったが、それは北の国からはじめて南国を訪れる若者はみな、すべてを「このうえもなく美しい」と考える、というだけのことだったかもしれない。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook